様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２２６６

研究課題名（和文）死せる哲学者シャルル・ルヌヴィエからのフランス近現代哲学史再編

研究課題名（英文）Re-writing the History of Modern French Philosophy by focusing on Charles Renouvier

研究代表者
合田　正人（Goda, Masato）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：６０１７０４４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究は１０数年前までほとんど顧みられることのなかったフランスの哲学者シャルル・ルヌヴィエ(1815-1903)の膨大な著作を精読することで、ルヌヴィエを中心に１９、２０世紀のフランス哲学史の書き換えをめざすものである。初年度は、ジャン・ヴァールの博士論文のなかにルヌヴィエと米国の哲学者ウィリアム・ジェイムズとの絆を見出すと共に、優れたルヌヴィエ論の著者フェディ氏を訪問、次年度は、パリで開催されたルヌヴィエ・シンポジウム「正しき共和制とは何か？」で、「間歇性」の視点からルヌヴィエの著述を取り上げた発表を行い、最終年度は、日仏哲学会での発表に加えて、モンペリエ大学のルヌヴィエ文庫で調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
シャルル・ルヌヴィエは批評家ジャン・カスーが「１８４８年人」と呼ぶ者に属し、生涯にわたって在野で「共和制」の維持に尽力した。そして今般、ルヌヴィエがフランスで再評価され始めたきっかけは、まさに現代フランスがつぶさに体験している深刻極まりない「共和制」の危機であった。社会的「較差」とは何か、「貧困」とは何か、この悲惨な社会のなかで「普遍的正義」をいかにして実現するのか。そこに「憐れみ」や「同情」といったものはどのように係るのか。ルヌヴィエ・シンポジウムにはフランスの元国民教育相も参加していた。これらの問題は日本においても深刻である。一哲学者の研究それ自体が社会的意義を持つと考える次第である。

研究成果の概要（英文）： These three yars, we've tried to re-write the history of French Philosophy in the 19-20tn century by putting into focus the works of Charles Renouvier(1815-1903). Such a research might look off target all the more because Renouvier had been a forgotten philosopher for a long time. First year, we've found the tie between Renouvier and William James in the PHD thesis by Jean Wahl ; and fortunately enough we could meet Laurent Fedi, one of the research leaders of Renouvier, in France. Second year, we took part in a Renouvier Symposium held at Paris and did a research presentation there on the idea of intermittence in the philosophy of Renouvier. And final tear, we could read manuscripts of Renouvier at the library of Paul Valery University in Montpellier. Besides this, we were very happy to be able to organize a Symposium on French Philosophy in the 19th century (September 2019) with the cooperation of the Society of Japanese-French Philosophy.

研究分野：西洋思想史　ユダヤ思想史

キーワード：共和制　シャルル・ルヌヴィエ　オーギュスト・コント　サン＝シモン　無限と有限　微分法　連続と不連続　間歇性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1)シャルル・ルヌヴィエについては、かつて九鬼周造や沢瀉久敬が彼に言及しているのを除くと、これまでのところ、本格的な研究書もルヌヴィエの著書の邦訳もまったく存在しないというのが現状である。フランスにおいても２０世紀全体を通じて、ルヌヴィエが再検討されることはなかった。報告者は偶々４０年近く前にルヌヴィエの存在を知り、レオン・ブランシュヴィックとの関連でその哲学を論じたが、ルヌヴィエ研究としては極めて不十分なものであった。

(2)しかし、その一方で１９９８年にロラン・フェディ氏の本格的なルヌヴィエ論が出版された。ルヌヴィエの哲学が１９世紀フランス哲学にとっていかに重要なものであるかを鮮やかに示した論考であったが、この論考をひとつの継起として、そこにまた、生涯を通じて「共和制」のために闘ったこの在野の哲学者の政治的ラディカリズムに注目する者たちが加わり、ルヌヴィエ再評価の動きが生まれた。報告者自身はレヴィナスやドゥルーズ研究のなかでルヌヴィエの重要性を再認識し、再び彼の論考を繙いたのだが、こうしてフランスでは、２０１９年にルヌヴィエ国際シンポジウムが開催され、同年、日仏哲学会でもシンポジムの主題としてルヌヴィエが取り上げられるに至った。

２．研究の目的

(1)日本における２０世紀のフランス哲学研究はこれまでベルクソンとドイツ現象学を二つの軸として進められてきた。しかし、歴史というものはそのような単純なものではありえない。モンテーニュが《私》について述べたように、それは数限りない襞を持つものである。ベルクソンは一度だけルヌヴィエに言及したが、それに着目する者はほとんど皆無であった。２０世紀のフランス哲学を先導したジャン・ヴァールは、ルヌヴィエがアメリカの哲学者ウィリアム・ジェイムズに与えた多大な影響を語っていたが、このヴァールの書物自体がほとんど読まれることがなかった。哲学の歴史の不当な単純化は哲学そのものに係る本質的な問題である。だからこお、この観点から、メーヌ・ド・ビラン、オーギュスト・コント、ベルクソンというビッグネームの象徴機能に今も頼っている１９世紀フランス哲学の歴史、今述べたような問題点を抱えた２０世紀フランス哲学の歴史の再編、その書き直しを、忘れられた哲学者ルヌヴィエによって試みたいと思うのである。

(2)どんな思弁哲学もその時代の状況と複雑な関係を有している。１９世紀は共和制と帝政が交替を繰り返した世紀であったが、ルヌヴィエは、ジャン・カスーが「１８４８年人」と呼ぶように、「共和制」のために闘うを者たちのひとりであった。２０世紀末からルヌヴィエが再評価され始めたのは、フランスが直面した共和制の危機と決して無縁ではない。その意味で、ルヌヴィエ研究は現代世界の政治的状況の分析にもつながる側面を有している。

３．研究の方法

(1)先述したように、ルヌヴィエについては何よりもまずその膨大は著作を蒐集し、それを読むことが必要である。ルヌヴィエの文体にはあたかも読まれることを拒むようなところがあり、単なる読解かと思われるかもしれないが、この当たり前の作業が実は至難の課題なのである。

(2)ルヌヴィエの手稿群はフランスはモンペリエの第三大学図書館に保管されている。報告者は最終年度にそこを訪ねたが、手稿はまったく未整理で、研究者たちがそこを訪れた形跡もまかった。公刊されたテクストの読解が先立つ課題であるが、この手稿群にも研究を拡げていかねばならない。

(3)レヴィナスやドゥルーズの研究から再びルヌヴィエに向かったと先に書いたが、この道筋は決して平坦なものではなく、無限と有限、連続と不連続、無限小なものなど、哲学の難問がそこで問われることになる。そこで、一方では微分〔無限小分析〕の歴史を辿りながら、これらの問題系を理論的に究明する。

(4)報告者は近代ユダヤ思想の研究をも推進しているが、新カント主義という点では、ルヌヴィエはドイツのヘルマン・コーエンに対応する存在である。新カント主義が、この二人の旗頭によって、フランスとドイツ両国でどのように展開されたかを考察する。

４．研究成果

　シャルル・ルヌヴィエ(Charles Renouvier, 1815-1903)はまさに一九世紀という時代の全幅を在野の哲学者として体験した稀有な哲学者であるが、残念ながら、その膨大な著作と手稿はモンペリエの第三大学（ポール・ヴァレリー大学）図書館のなかで今もなお眠っている。近年ようやくその哲学的意義に注目する論者が現れ、ルヌヴィエをめぐる研究状況は大きく変化しつつある。今からほぼ４０年前に、報告者はルヌヴィエの名を知ったのだが、今思うと、その４０年の間、報告者が係ってきたガブリエル・タルド、アンリ・ベルクソン、ウラディミール・ジャンケレヴィッチ、エマニュエル・レヴィナス、ジル・ドゥルーズなど１９‐２０世紀を代表するフランスの哲学者たちの問題系――例えば連増と不連続、有限と無限――はいずれもがルヌヴィエと無縁ではない。ルヌヴィエをいわば蘇生させることで、１９－２０世紀のフランス哲学史を根本的に書き換えるのみならず、これらの哲学者たちの営為のある意味では知られざる背景をも示したいというのが報告者の企図である。

(1)２０１９年１１月１５日と１６日、パリで「正義の共和制とは何か？――シャルル・ルヌヴィエのアクチュアリティ」(*Qu'est-ce qu'une république juste? Actualité de Charles Renouvier*)という国際シンポジウムが開催された。報告者はそれに参加し、シンポジウムの最後に、「間歇性」(intermittence)というルヌヴィエのキーワードをめぐってプルーストにも言及しながら拙い発表を行った。すでにルヌヴィエとプルーストに関しては、２０１４年にプルーストをめぐる明治学院大学でのシンポジムで発表したが（「マルセル・プルーストとシャルル・ルヌヴィエ」(明治学院大学『言語文化』２０１５年3月、１１４－１２７頁)、「間歇性」と「歴史性」との連関を新たに打ち出したつもりである。

１９０３年にルヌヴィエが死去してから百十五年、果たしてフランスで、いやどこかで、ルヌヴィエをめぐるシンポジウムが開催されたことがあったのかどうか、少なくとも私は知らない。いずれにせよ、このルヌヴィエ・シンポジウムは画期的な事件であった。とはいえ、実を言うと、会場にはほとんど聴衆はおらず関係者だけがいるというとても寂しい会であった。それでも、おそらく初めて「ルヌヴィエのアクチュアリティ」なるものがそこで認知された、というか、主張され要請されたと言えるだろう。

ただ、シンポジウムの総タイトルが告げているように、何よりもフランスが目下直面している共和制の危機のなかで、ルヌヴィエがまさに呼び出されたのだと思われる。その点では、オランド大統領の時代に国民教育相を務めたヴァンサン・ペイヨン(Vincent Peillon, 1960-)が最初から最後まで最もアクティヴな参加者であったのはとても印象的だった。ルヴィエの『人間と公民の共和制手引き』(*Manuel Républicain de l'homme et du citoyen*)も、発表者のひとりイザベル・ド・メクネム(Isabelle de Mecquenem)によって近々再版されるはずである。

『共和制手引き』の発表は一八四八年、ルイ・プラト(Louis Prat)との最晩年の対話(*Les derniers entretiens*, J.Vrin, 1930)を読むと、ルヌヴィエが生涯にわたって「共和制」とは何かという問いを、サン＝シモン、オーギュスト・コントと係り、また、ピエール・ルルーたちとも協働しながら在野で考え続けたことが分かる。ルヌヴィエは「一八四八年人」(Quarante-huitard)とジャン・カスー(Jean Cassou, 1897-1986)が呼ぶ者のひとりである。

レピュブリック(*res publica*)とは何かというのは恐ろしく難しい問いであるが、ルヌヴィエ自身は、一方に「正義」〔公正〕(Justice)、他方に「善意、仁愛、兄弟性〔博愛〕」(Bonté, Charité, Fraternité)を置きながら、「共和制の目標は兄弟性を正義たらしめることである」(*Manuel républicain*, Editions Pagnerre, 1848, p.76. 以下 *MR* と略記)と明言している。pitié を justice たらしめることとも言われている。また、ルソーのいう「一般意志」を踏まえて、ルヌヴィエは Chose de tous, Chose par tous, Chose pour tous〔万人のモノ、万人によるモノ、万人にとってのモノ〕という表現で「正義」を語ってもいる。

(2)ルヌヴィエは三〇冊を超える膨大な記述を遺した。総てを読んだひとはおそらくいないのではないだろうか。それどころか、ルヌヴィエのフランス語は決して読み易くなく、理解しがたい箇所が多数ある。加えて、ルヌヴィエの仕事は極めて広範なもので、到底その全貌を把握することは報告者にはいまだできないのだが、それを貫くひとつの基軸が「共和制」であるとするなら、もうひとつの基軸は、第一の基軸と不可分なものだろうが、ルヌヴィエが「新批判主義」(néocriticisme)と呼ぶものであって、当然のことながら、エマニュエル・カントと係る。

もっとも、ルヴィエはライプニッツのモナドロジーに触発されてプラトと共に『新モナドロジー』を書いた哲学者でもある。「実体」(substance)なるものを斥けていたルヌヴィエはライプニッツに倣って「モナド」を「実体」と呼びながらも、これは自分の唱える「相対性」と矛盾することではないと言っている。と同時にルヌヴィエは、改革派教会の牧師アルバン・マゼルが用いた「ペルソナリズム」(personnalisme)をも標榜した。「正義が諸人格の社会の条件である」(*DE*, p.74)と言っているように、「ペルソナリズム」は「共和制」そのものであって、コントのいう「人類の宗教」に代わる宗教としてルヌヴィエはそれを提示してもいる。

「新批判主義」ということで言えば、これは勿論フランスに限った現象ではなかった。ドイツでも１９世紀中葉「カントに戻れ」(Zurück zu Kant)という言葉と共に「新批判主義」の運動が起こった。その旗頭のひとりがマールブルク学派の創始者ヘルマン・コーエン(Hermann Cohen, 1842-1918)だったのだ。

報告者はコーエンにも少なからず関心を抱いており、コーエン没後１００年を記念して２０１８年6月「京都ユダヤ思想学会」でシンポジウムを開催し、そこでささやかな発表を行った（「ヘルマン・コーエンにおけるユダヤ教―倫理・政治・科学」(『京都ユダヤ思想』第１０号、２０１９年、６６－８６頁)。ルヌヴィエとコーエンは「空間の外在性」をどう解するかという課題を共有し、一方で「物自体」(Dinge an sich)の観念を斥ける点では立場を同じくし、他方「微分」ないし「無限小なもの」(infinitésimal)を容認するか否かでは鋭く対立していた。コーエンは『無限小方法の原理』(*Das Prinzip der Infinitesimal-Method*, 1883)の著者であり、ルヌヴィエはというと、理工科学校時代にコントから微分法を学びながらも、後年は、「無限小なもの」を含めて「無限」なるものを一切許容しなかった。

(3)ルヌヴィエという哲学者のことを報告者が初めて知ったのは、ギュルヴィッチ(Georges Gurvitch, 1894-1965)の『ドイツ哲学の現下の諸傾向』(*Les tendances actuelles de la philosophie allemande*, J. Vrin, 1930. 以下 *TA* と略記)を読んだ時だった。ブランシュヴィック(Léon Brunschvicg, 1869-1944)がこの書物に序文を寄せ、そこでフッサールの「現象学」(phénoménologie)

とルヌヴィエの「現象主義」(phénoménisme)との類縁性を強調していたのであり。フランスの哲学的ナショナリズムの現れをここに見るべきだろうが、ドイツ「現象学」の移入にフランスの哲学の諸潮流がどう反応したかという極めて重要な問題がここで問われていると言えるだろう。異邦の思想の新鮮なインパクトを過小評価するわけでは決してないが、アランやルヌヴィエが「現象学」への道を知らず知らずのうちに準備していたということは否めない。

思えば、「現象学」はゲオルク・カントールらによって指摘された「実無限」のパラドクスに対するひとつの反応であった。そのことはレヴィナスの哲学が雄弁に証示するところだろう。この点について、池田真治は「ライプニッツの無限小概念――最近の議論を中心に」（京都大学『哲学論叢』２００６年、３３号、１３８－１４９頁）で、A.ロビンソンの実無限小解釈と石黒ひでの有限主義的解釈を対比しながらこう書いている。

「石黒解釈によれば、無限小は虚構でしかなく、「無限大とか無限小は、いくらでも大きくあるいは小さくすることのできるような大きさのことしか意味しない」(GP VI, 90) という『弁神論』での表明からも明らかなように、ライプニッツはロビンソンの先駆者というよりもコーシーあるいはヒルベルト流の有限的定義の先駆者である。」（１４１頁）

石黒自身打ち明けているように、彼女のこの立場は明らかにルヌヴィエを踏まえたものであろう。無限小にせよ無限大にせよ、カントールに抗して「実無限」を認めない、ひいては「連続性」も認めないというのがルヌヴィエの立場であった。

カントールとルヌヴィエとのこの対立はすでに示唆したように、スピノザ、レヴィナス、ジャンケレヴィッチといった、報告者が長年係ってきた哲学者たちの核心に突き刺さるものだったのだ。

(4)報告者を再びルヌヴィエに引き戻すことになったのは、先述のレヴィナス『全体性と無限』の指導教官がジャン・ヴァールであったこと、そして、同書に何の説明もなく括弧で括られて記された「根源的経験論」(empirisme radical)という言葉であった。「根源的経験論」はウィリアム・ジェームズの用語で、レヴィナス自身がジェームズを読んだ形跡はなく、おそらくヴァールの博士論文『イギリスとアメリカの多元主義哲学』(*Les philosophies pluralistes d'Angleterre et d'Amérique*, 1920)を読んだための言及ではないかと考えられる。ジェームズは「根源的経験論は連接的経験についても完全に平等な権利を認める」（『純粋経験の哲学』岩波文庫、５０頁）と書いている。問われているのは and という接続詞である。この点については、コーエンに連なるドイツのユダヤ系思想家フランツ・ローゼンツヴァイク(Franz Rosenzweig, 1886-1929)もまた『救済の星』(*Der Stern der Erlösung*, 1921)で、und を「根源語」として挙げている。

and すなわち et はドゥルーズ／ガタリのキーワードでもある。しかも、『ディアローグ』での発言からも分かるように、ドゥルーズもヴァールの博士論文を参照していたのだ。ジェームズは、彼自身が認めているように、ルヌヴィエによって生き延びることができたと言っても言い過ぎではないほどルヌヴィエからインパクトを受けた。実際、「眩暈」「催眠」とその「感染」など、両者の間には幾つもの接点が見出されるが、「カテゴリー表」の改変という、ルヌヴィエ自身最も困難な課題とみなすものを遂行するなかで、ルヌヴィエが「関係」(Relation)をカテゴリー表の筆頭に置いたこと、そこからジェームズは「根源的経験論」の発想を得たと推察される。そしてそれが、ヴァールを介して、レヴィナスとドゥルーズに伝わったのである。

(5)拙著『ジャンケレヴィッチ――境界のラプソディー』（みすず書房）のなかで、報告者はこう書いている。「ジャンケレヴィッチが〔二つの無限を語る〕パスカルに与しているのはもちろんだが、ただその際、シャルル・ルヌヴィエの『一般論理学概論』の内容が紹介されているのを忘れてはならない。「ベルクソンはルヌヴィエを決して引用しないが、いつもルヌヴィエのことを考えていた」とジャンケレヴィッチは言っているが、ルヌヴィエは無限性と連続性を容認することなき有限性と不連続性の哲学者であって、ギュイヨーとベルクソン、ジンメルとベルクソンのあいだを縫うように進んだのと同様、ここでもまた、ジャンケレヴィッチは、無限性と有限性、連続性と不連続性のあいだを創出していると言ってよい。このような姿勢が後に、「連続性とは無限の不連続性である」といった命題を生むことになるのだろう。」（９０頁）

「無限小なもの」(infinitésimal)、「ほとんど無」(presque rien)は、ジャンケレヴィッチのキーワードにほかならない。ジャンケレヴィッチの『アンリ・ベルクソン』にはその随所にルヌヴィエの名が登場する。始まりも終わりもない「持続」の哲学者を論じながら、ジャンケレヴィッチは、ルヌヴィエに言及するのみならず、ルヌヴィエの友人ジュール・ルキエ(Jules Lequier, 1814-1862)の「始まりとは偉大な語である」をも引用していた。報告者はこれまでジャンケレヴィッチの戦略を理解していなかったと言わねばならない。こう主張している。「ベルクソン的連続性がキルケゴール的非連続性にこれほど接近したことは今までにはなかった。しかし今こそ人は、ウィリアム。ジェームズが意識流と意志の発動（フィアト）とを(...)、ベルクソンへの愛着とルヌヴィエへの忠誠を両立させることができた理由がよく分かるである。」（『アンリ・ベルクソン』藤原書店、２５６頁）

(6)次に言及しておきたいのは、かつてジャンケレヴィッチと取り組んでいたときには分からなかったことが、今回の研究のなかで初めて明らかになった諸点である。

①何よりもジャンケレヴィッチは、義兄カスーが「一八四八年人」と呼ぶ者としてルヌヴィエが抱き続けた、「普遍的正義」の社会としての「共和制」への夢をルヌヴィエと共有していた。大学人でありながらも、ジャンケレヴィッチは、地下の抵抗運動に加わり、路上での様々な運動に

寄り添い、「ソルボンヌを燃やせ」と言い放ち、フランスの様々な層の市民たちから愛されたが、在野の哲学者ルヌヴィエはまさにジャンケレヴィッチのような哲学者の到来を待ち望んでいたのではないかと思えてくる。
②「死なき哲学」とレヴィナスが呼んだベルクソンの信奉者ジャンケレヴィッチが大著『死』の著者となったのには、ジンメルの『生の直観』もさることながら、次のような考えがあった。「「最後の」息、この厳かな息は、それに続く息をもはや有していないがゆえに、数ある行きのひとつではない。「最後の」息は虚無への移行、絶対的に他なるものへの移行であるような移行を表している。これこそ、ルヌヴィエが「拍動的瞬間」(instant pulsatile)、キルケゴールが「質的跳躍」の観念によって思い描いていたような最期の時――死ノ時――である、めくるめく閾、卓越セル閾である。」(『最初と最後のページ』２０５－２０６頁)
③「ほとんど無」として、現れては消失するような「瞬間」とその「合間」(intervalle)から成るものとして、ジャンケレヴィッチは時間を捉えていたが、「瞬間」と「合間」の関係は、彼の道徳哲学では、自身はほとんど存在することなく、他者を存在させる「愛」と、「忠誠」「忍従」「正義」のような「徳」との関係そのものとして捉え直される。あたかも間歇泉のように、愛はほとんど無の瞬間に噴き出しては消えるのだ。
　そして、ルヌヴィエが「不連続性」を表す語として選んだのが「間歇性」(intermittence)だったのである。この語はフランスの解剖学者ビシャ(Marie Francois Xavier Bichat, 1771-1802)のいう vie organique と vie animale との区別を批判的に検討する過程で採用されたもので、ビシャは前者を心臓の鼓動、呼吸、血液の循環、消化などのように就寝中や失神中にも途絶えることのない連続的生、後者をこうした状態で停止される視覚や摂食などの不連続な生とみなし、この不連続を「間歇性」と呼んだのだが、これに対してルヌヴィエは、やはり「実無限」の背理を持ち出して、ビシャのいう連続的作用も間歇的なものだと指摘したのだ。「間歇（性)」、それは『失われた時を求めて』の著者プルーストのキーワードでもあった。
　「間歇性」は時間のあり方として道徳的生、心理学的生に諸相に刻印されていたのみならず、歴史的・政治的社会の動きをも表すものだった。進歩と退歩を繰り返す社会は、いずれかの方向に大きく動く直前に「中間休止」のごとき空白を有しており、その意味で必然的に間歇的なものなのだが、ルヌヴィエにおると、「普遍的正義」の社会への動きもこの空白においてこそ準備されるのだ。
(7)ジャンケレヴィッチに戻るが、一九六二－六三年度にブリュッセル自由大学でなされた道徳哲学講義の記録が二〇〇六年に出版された(*Cours de philosophie morale*, Seuil, 2006. 以下、*CPM* と略記)。そこでは、ジャンケレヴィッチ自身、「間歇〔性〕」という語を道徳的生そのものの本質として語っている。それだけではない。最後に、かつてジャンケレヴィッチ論を世に問うた時には、まったく分かっていなかったことを指摘しておきたい。ジャンケレヴィッチはこう書いている。
　「エゴ志向的で食人的な愛は、愛される者を呑み込み、貪り食い、消化する。あたかも愛される者が食糧で、それゆえ結局、愛すべきひとがもはやいないかのように。脱自〔的愛〕においては逆である。そこでは、愛するひとのほうがもはやいないのだ。けれども、これら正反対の現象は結局は同じ事態に帰着する。」(拙訳『最初と最後のページ』、みすず書房、２９０頁)
　カニバリズムの譬えは他の箇所にも見られる。二〇一五年に出版された未収録論集『抵抗の精神』(*L'esprit de résistence*, Albin MIchel, 2015)に収録された「反ユダヤ主義の心理分析」には、「反ユダヤ主義はファシスト的食人(cannibalisme fasciste)の最も典型的な形式である」(p.130)と書かれているだ。以前から気になった箇所なのだが、それがルヌヴィエと結びついていることに気づいたのは、つい最近のことにすぎない。実は、『人間と公民の共和制手引き』には、「富者たちは貧者を食べる」(les riches mangent les pauvres)という表現が幾度も登場するのである。
　４０年に及ぶ読解、しかしそれがいかに表層的なものであったかを報告者はこの３年間で思い知らされることになったが、何よりも、おそらく今誰も訪れることのないルヌヴィエ文庫を訪れることができたこと、フェディ氏を初めとする第一線のルヌヴィエ研究者たちと交流できたこと、そして、少なからざる点で自分自身のルヌヴィエ読解の欠落部を補うことができたこと、そしてそれを日仏哲学会を初めとする公の場所で発表し、拙い論文を幾つかの論集に掲載させていただいたこと、これは極めて大きな成果であった。状況が許せば、メクネン教授を日本に招聘する企画も進んでいる。このような研究の冒険を可能にしてくれた日本学術振興会に心より感謝申し上げたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Masato GODA	４．巻 1
２．論文標題 The Secret Journey of a Small Grammer. Spinoza in Contemporary French Philosophy	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Proceedings of the Third International Symposium of Judaism. Judaism in Modern era	６．最初と最後の頁 pp/112-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Masato GODA	４．巻 1
２．論文標題 Rhythm and Sense in the Philosophy of Emmanuel Levinas	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Minerva	６．最初と最後の頁 pp.23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 合田正人	４．巻 臨時増刊
２．論文標題 アンダーグラウンド異景――バトラーはスピノザをどう読んでいるか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代思想（青土社）	６．最初と最後の頁 pp.114-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masato Goda	４．巻 9
２．論文標題 A Philosophy of ''Death Poems''	５．発行年 2017年
３．雑誌名 CISMORユダヤ学会議(同志社大学一神教学際研究センター)	６．最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 合田正人	4．巻 135
2．論文標題 パシェさん、まだ宿題できてません	5．発行年 2017年
3．雑誌名 文芸研究（明治大学文学部）	6．最初と最後の頁 173-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　8件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 合田正人
2．発表標題 ヘルマン・コーエンにおけるユダヤ教――倫理・政治・科学
3．学会等名 京都ユダヤ思想学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Masato GODA
2．発表標題 Proust et Renouvier. Autour de la notion d'''intermittence''
3．学会等名 Comite du Colloque Charles Renouvier（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Masato GODA
2．発表標題 The Secret Journey of a Small Grammer. Spinoza in Contemporary French Philosophy
3．学会等名 CISMOR, Doshisya-University（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Masato Goda
２．発表標題 Rhythm and Meaning in the Philosophy of Emmanuel Levinas
３．学会等名 Emmanuel Levinas and East Asia（高雄中山大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 合田正人
２．発表標題 西田幾多郎と「模倣」の問題――タルドへの小さな言及の波紋
３．学会等名 西田哲学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Masato Goda
２．発表標題 Introduction to a philosophy of archipelago
３．学会等名 International Association of Japanese Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masato Goda
２．発表標題 Emmanuel Levinas, lecteur d'Auguste Comte ?
３．学会等名 Positivisme sans frontiere（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masato GOda
２．発表標題 Toward an Archipelagic Rhythmo-Grammatology of ''East-Asia''
３．学会等名 International Society of East-Asian Philosophy（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 合田正人
２．発表標題 シャルル・ルヌヴィエと《形而上学のディレンマ》
３．学会等名 日仏哲学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masato Goda
２．発表標題 Morphologie rythmique de la vie chez Shigeo Miki
３．学会等名 College international de philosophie（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 檜垣 立哉、小泉 義之、合田 正人	４．発行年 2019年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 512
３．書名 ドゥルーズの２１世紀	

１．著者名 池田喬、垣内景子、合田正人、志野好伸	４．発行年 2019年
２．出版社 明治大学出版会	５．総ページ数 201
３．書名 いま、哲学が始まる	

１．著者名 合田正人	４．発行年 2017年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 259
３．書名 入門ユダヤ思想	

１．著者名 合田正人	４．発行年 2017年
２．出版社 書肆心水	５．総ページ数 320,内229-273担当
３．書名 共にあることの哲学と現実（岩野卓司編）	

１．著者名 Masato Goda	４．発行年 2017年
２．出版社 Olms	５．総ページ数 279(209-220)
３．書名 Mecanique et Mystique	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考